

県北 どらくろあ

第53号 2020年8月1日（毎月1日発行）

県北群星伝①⑦ 生活を俳句に写した達人

近藤 昌平^{しょうへい} 享年90歳（庄原市七塚町）

近藤昌平さんのことを書きたいと思った。そして、八月号に書くことを希（のぞ）んだ。この句があるからだ。

爆心地炎天の

フリーマーケット

爆心地とは、八月六日に広島に落とされた原爆の中心地である。子どもの頃、近藤昌平さんはその爆心地に住んでいた。父親が広島市で鉄道関係の仕事に就いていた。

庄原の七塚の実家では、近藤さんの祖母が小さな売店を華街に爆心地の傷跡は見当たらない。ふんだんに物が溢れるフリーマーケットの情景が眼前に広がっている。この平和がいつまでも続いて欲しいと心から願う。しかし、この句はそれだけでは終わらない。炎天のフリーマーケット……、広島は暑い。いや、広島だけではない。地球温暖化による気候変動で、記録的な猛暑が続いている。未来への不安、いや予感をも内包しているように思えてならない。

父の野火子の野火

一の火となれり

これは第三集に掲載された句。この頃の近藤さんの句は正統派だ。第三集が発行された当時、「氷海」という俳句誌に会員だった近藤さんの句が載っている。

耕運機一升瓶の油飲む

無骨な耕運機は、人間に例えるならば肉体労働者だ。一升瓶から手酌でコップ酒を飲んで、いる寡黙な男の姿が重なる。

落椿神も狼藉し給えり

自然の摂理はときに残酷に思えることもある。



近藤昌平、洋子（ひろこ）夫妻
（庄原上野公園にて）

「正岡子規から『ホトトギスを』を受け継いだ虚子は、俳句を少しも発展させていない……」そんな言葉の断片が心に残っている。

近藤さんは途中、俳句から離れた期間はあるが、多くの俳句誌を渡り歩いた。わかっているだけでも「焼野」「青女」「芭蕉」「氷海」「廻廊」「古志」「円座」「舞」。作句に薪をくべる目的もあったのだろうが、型に囚われるのを嫌ったのではないか。

父の日や思ひ出しては詫びばかり

(古志・二〇〇九年)

片陰の最も細き時通る

(古志・二〇一三年)

片陰とは物陰のこと。この当時の古志では「近藤安楽子」の俳号を使っている。

カーテンの向うはきつと星月夜

(円座・二〇一三年)

文化の日一字も読めぬ書道展

(舞・二〇一六年)

人間はやっぱり淋し水中花

(舞・二〇一六年)

近藤さんの膨大な数の俳句をさらった印象は、年齢を重ねるごとに俳句の伝統から解放されて、自由気ままに詠んでいるように思える。ときには子供のようにならぬ邪気に、思った言葉をそのまま俳句に写している。産経新聞の投書欄に載った近藤さん(当時、71歳)のエッセイのコピーが、俳句誌に挟んであった。「私は十数年前に公務員を退職した。つまり卒業したのである。考えてみ

ると、小学校、中学校、高校、公務員と次々と卒業してきたわけだが、これですべて終了とはならなかった。わたしが生涯学習に俳句と写真を選んだからである。

市の公民館のカメラ教室を受講して写真にのめり込んだ。仲間の若い女性はもちろんのこと、高齢者でも各地の写真コンテストでいつも最優秀賞に選ばれる猛者もいる。何と奥の深いことか。つまり生涯学習には死ぬまで卒業はないようである。死ねば現世は卒業かもしれないが、



庄原に來訪した山口誓子氏(中央)を囲んで。前列左端が藤井艸眉子会長、同右端が近藤さん。

あの世ではまた一年生の入学が待ち受けているかもしれない。わたしは若い時からの句友の逝去にあたって、

吟行の十万億土冬銀河の追悼句を詠んだ。

この俳句もまた、現世とあの世につづく卒業のない世界かもしれないと思うのである。

近藤昌平さんは今年の三月二十三日、体調を崩して入院していた庄原日赤病院で、就寝中に亡くなった。その日の午後には、洋子夫人とお孫



林の中の吟行&俳句会

さんに付き添われて、車椅子で三階のベランダを散策、よく晴れた日では比婆の山なみまで一望できたそう

だ。死後に原因を調べる検査が行われたが、これといった異常はみつからなかったという。飄然と旅立ったのだ。拙いが、一句献じる。

住みにくき現世うつけよさらば春の風

近藤さんは、俳諧の伝道師でもある。地方の俳句会の指導はもちろん、機会があれば友人、知人に句作をすすめていた。筆者もその中のひとり、本誌のどらくる俳壇も、近藤さんの要望で誕生した。過去の作品には執着しないのか、自分の句集は出されていない。

原博巳作土笛の寒雀

句友として寄り添った土鈴作家の原さんを詠んだ句がある。

秋灯火のらくろと会う占本屋

筆者の店を詠んだ句もある。桃源郷を散策している近藤さんの姿が思い浮かんだ。

「いつになるかわかりませんが、あの世で再会したら吟行に行きましよう。おもしろそうな場所を案内してください。それまでは、こちらでまだ頑張ります」

大江健三郎『飼育』

——占領下であることの再認識

前回に取りあげた開高健に続いて

大江健三郎『飼育』（1958年刊、

文藝春秋新社、新潮社文庫）が芥川

賞を受け、大型新人として華々しく

登場しました。だが、まだこの時は、

大江の本当の新鮮さに、気づかれて

いなかったように思います。

まず、物語の粗筋に触れます。

戦時下、墜落する飛行機から脱出

した米軍の黒人兵を開拓村の村人が

捕らえ、地下倉に収容します。戦況

の逼迫というより、「敵の飛行機も

僕らには珍しい鳥の一種にすぎな

い」のどかな村という状況下です。

少年兄弟たちは、黒い大男に「衝撃

のような恐怖」を感じます。が、や

がて「黒人兵を獣のように飼う」こ

とに誇らしさと、優越感にひたりま

す。黒人兵を外に導き、村人と接触

させるまでに関係は進みます。とこ

ろが、県への移送が決まったことを

悟った黒人兵は、態度を豹変し、兄

の「僕」を人質に立て籠もるのです。

やがて、黒人兵は、「僕」の父親に

鉈（なた）で頭をぶち割られて終末

を迎えます。

選考委員は、「新しい才能」「異常

な題材」「抜群の出来」と賞賛します。

一人だけ、「文学を通して、政治に関

これに続く、「人間の羊」「芽むし

り仔撃ち」「戦いの今日」の意欲作は、

占領下での米兵の横暴な生態などを

描きだしています。これは逆に言う

と、安直に「戦後民主主義」になび

かない道の模索です。

この1年後の卒論に大江は、「サル

古今東西の文学には
たくさんの名作があ
ります。そんな名作
の中から筆者の心に
残る作品を今の青年
たちにも読んでもら
いたいと思い、毎月
1冊ずつ紹介してい
ます。

また読んでみたい本⑤1

青年たちに

音谷 健郎



【新潮文庫版の表紙】

第51回は、大江健三郎の『飼育』です。
もし興味を持ったらぜひ読んでみてくだ
さい。

筆者紹介：1944年、旧・庄原町生まれ。新聞
記者、大学講師を経て現在、庄原市東本町在
住。大阪文学学校講師

実存主義ブームの渦の中心に位置す
るようになりました。

作家が、強い主義主張と社会変革
をめざして小説と取り組んだプロレ
タリア文学とは違った形で、大江は
「政治参加」の道を切り開きました。

だがこの時、そのことの意味の大き
さに気づく人は少なかったのではな
いでしょうか。

中国山地のわが町にも進駐軍の
ジープが3、4台やってきたことが
ありました。私は、年長の従兄たち
に、「パ・パママ、ピカドンでハンダ
リー、ハンダグリー」と言って手を差
し出せと伝授されていました。この
通りにしたかどうか記憶にありませ
んが、米兵からバラバラにした
チューインガムをもらったのです。
それを戦利品に誇らしい思いをした
記憶があります。大江のように、米
兵を「飼育」の対象にするとは、想
像だにできませんでした。大江が、
文学に託し、戦後日本の危うい現実
に向き合った先見性に思い至るので
す。大江は、「複雑な戦後」にいち
早く覚醒し、そこでの行動原理を手
探りしていたと思えます。

次回は、井上靖『敦煌』を取りあ
げます。

与する」という大江の考え方は、身
振りの方が大げさで……と、その「政
治性」に触れた委員がいました。今
読み返してみても、その政治性はもっ
と突っ込んで、戦後の「占領」に通
じる大國米国との関係が早くも描か
れているように思えてなりません。

「サル」を取りあげています。元々は「パ
スカルカカミューを」と読書してい
たのですが、サルトルの出現で方向
を変えたのでした。以後、サルトル
について「実存主義」と合わせて評し、
3年後の61年には早くもパリでサル
トルと会見します。日本のサルトル、

「草花の博物誌」

著者紹介…一九三一年、比婆郡(現・庄原市)比和町に生まれる。農学博士(九州大学)。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びと」(シンセイアート出版)から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。

ウツボグサ 甘い蜜を吸った夏の思い出

道ばたや荒地にもみられるウツボ

グサの花はあまり大きくない花です。でも、ウツボグサの花にはクマバチやクロマルハナバチなど大型のミツバチのなかまがよく訪れます。クマバチは大きな体に似合わず、器用に長い口ばしを小さな花の中へつつこみ、ブンブンと羽音をたてながらじょうずに蜜を吸っているとこ

ろをよく見かけます。

それはあまい蜜がたっぷりあるからです。私が子どもの頃、花を抜きとり、筒のようになっていた花びらの根元を吸ったものです。口の中にウツボグサの花の蜜があまくひろがっていったことを、今でもはっきり覚えています。むかしの子どもは今のよ



うにおやつがじゅうぶんなかったもので、ウツボグサの蜜を吸ったり、クワの実をつんだりして楽しんでいました。そして、それらを味をとおして「夏が来たな」と実感したものでした。今の子どもは季節折々の楽しみを味わうこともなく過ごしている姿を見るにつけ、さびしい思い出がします。

ウツボグサの花が咲き出すと、ホタルも現れ、川辺の夜空に美しい光もようをえがいてくれます。ホタルの多かったむかしのこと、ホタル狩りを楽しんだ後、とらえたホタルをかごの中で長生きさせようと、スギナと一緒にウツボグサの花穂をホタルかごの中に入れていました。ホタルは花の蜜が吸えませんが、子どもたちは蜜を吸ってホタルが長生きしてくれると信じていました。ホタルをいとおしむやさしい心が感じられます。むかしの子どもたちはウツボグサのことをホタルグサと呼んで、ホタルとともに季節感を味わっていたのです。

むかし、矢を入れた武具「うつぼ」のことです。穂のようにのびた花のあつまりは、まるでうつぼにいつぱい入れた矢のように見えます。ウツボグサの花は夏おそくなると、枯れて、花穂は茶色になります。そのようなことから、夏枯草とも呼ばれています。茶色になった花穂はつんでよく乾し、それをせんじてお茶がわりに飲んで、腎臓の悪い人は薬にしていたようですし、枯れた茎や葉をせんじたものは眼薬にしていたようです。ウツボグサを薬として効めに気づいたむかしの人の知恵はすばらしいな—と思います。

ヘクソカズラ 多くの名を持つ身近な草花

葉をつみ軽くもんで、においをかいたら誰でも一度でヘクソカズラの

名前を覚えてしまいます。臭いだけではなく、荒地でもたく



ましくつるを伸ばして生きている姿は大むかしから人びとの眼にとまっていたようで

かわらぶちに
はいおぼとれる くそかずら
たゆることなく 宮仕せむ

(意識)

カワラフジに
まといつきながら ひろがり 咲
き乱れている ヘクソカズラ
そのつるがいつまでも 絶えない
ように

私も絶えることなく 宮仕(みやづか) えしよう

と万葉集の中にうたわれています。

ヘクソカズラの名前の由来はとくにわかったと思いますが、学名はパエデリア・スカンデンス(ふんなどの汚物・はいあがるという意味)、

日本でもヨーロッパでも臭いが印象に残り、名づけられたようです。

ヘクソカズラはヒガンバナに劣らぬほど多くの名前を持っています。

ヘクソカズラは多年生の毒草です。

つるは枯れても根は生き続け、春を迎えると、絶えることなく、つるを伸ばします。根は「いも」と言うには貧弱ですが、毒だから「ニガイモ」と呼んでいるところもあるようです。また、馬や牛は決して食べないので「ウマクワズ」と呼んでいるところもあるそうです。

夏の終わりから秋、かわいらしい花をつけます。その花を早乙女(そうとめ)さんの花笠に見たてて「ソウトメバナ」とか「ソウトメグサ」、「オドリバナ」と呼んでいるところ

もあるそうです。また、花が小さく中心が紅色などところをお炎(きゆう)になぞらえて「ヤイトバナ」と呼ぶこともあります。

草木に呼び名が多く残っているということは、その草や木が人目によくつくばかりでなく、人びとと深いかわりをもっていたという証拠です。

「つれづれ歌談」②

松岡 初枝

・夜をこめて鶏の空音(そらね)ははかるともよに逢坂(おうさか)の関はゆるさじ (清少納言)
・夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月やどるらむ (清原深養夫)

どちらも百人一首でおなじみの歌ですが、深養夫(ふかやぶ)は清少納言の曾祖父で、古今集の歌人です。清少納言は、代々歌の名人がいる家系の中で、私は歌が下手と言い、散文である枕草子に力を入れて書いたようです。

”夏は夜“月が輝く夜も、螢が飛び交う暗い夜もいいと言っていますが、たぶん夏の夜には蚊がそう



どう発生して、悩まされたのではないのでしょうか。「もう、蚊の奴め！」

時は下って鎌倉時代、元寇という国難があり、幕府も民も恐れおののいていたそうです。恐ろしい元軍の前に、大きな伏兵と小さな伏兵が出現したのです。大は台風、小は蚊です。

元は今のモンゴル。大平原の乾いた地には、あまり蚊はいないようで、蚊を知らない兵達は、夜の野営地に蚊の大群が押し寄せて、もう寝られたものではなく、止む無く夜は沖の軍船に引きあげていたので。

さて、そこに台風が到来し、元軍はひとたまりも無く、海に沈んでしまいました。

今の世も、夏の夕方頃から蚊が暗躍します。

・老ひの身に集(たか)り血を吸うやぶつ蚊を鬼の顔して打ち落としたり

思わずそう詠むと、友人は「あら、はっちゃん、私は一年中目の中に蚊が飛んでるワ」
そりゃ飛蚊(ひぶん) 症だよ!

三人の小学生が歩いて来る。一番小さな子が、背中と正面にそれぞれランドセルを担いで、さらに右肩にもランドセルを引っかけて、ヨタヨタした足取りで先を行く二人の背中を懸命に追いかけている。

「おい、コータ、モタモタすんなよ。ゲームする時間が無くなるじゃねえか」

いかにもガキ大将といった体格のいい少年が声を荒げた。

「おい、健治！」

日焼けした顔にそう書いてある。

「おれの顔を忘れたのか？ ほら、お前の母さんの従妹の旦那の弟だ」

考えている。

「まあいい。ちょっと来い」

石段を登り切ったところにあるお寺の山門の前まで来ると、三つのランドセルの重みにつぶされるように、コータが蹲った。

「名前は何？」

もう一人の坊主頭の少年に尋ねた。暗い眼で睨まれた。

「じゃあ、タロウでいいか？」

「シンジ」

ぶっきらぼうに名乗った。

「健治もシンジも坐れよ」

二人が渋々腰をおろした。山門の脇に、六体のお地藏さんを祀った小さなお堂がある。そこにお供えしてあるバナナの房を取って来た。一本ずつむしって、三人に手渡した。

「どうした？ 食えよ。うまいぞ」

残った二本をムシャムシャと平らげた。バナナは一番の好物だった。

六地藏

あきふゆひこ
亜木冬彦

現代御伽草子④7

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

「ドロボーだぞ」

健治が言った。

「仏様のありがたいお下がりだ。家でも仏壇にお供えした後は、みんなでおいしく食べるだろ？」

納得した表情ではなかったが、おおずおとバナナの皮を剥き始めた。

「で、コータがなんで二人のランドセルを運ぶんだ」

健治とシンジが顔を見合わせた。

「プロレスで勝ったからだよ。おれのチキンウイングフェイスロックで、コータがギブ（アップ）したんだ」

健治の宣言に、コータがえへへと愛想笑いを浮かべて頭を掻いた。

「プロレスに勝った方がえらいのか？」

「負けたやつよりはえらいんじゃない？」

シンジが大人びた物言いで口をは

さんだ。

「じゃあ、おれとプロレスやるか？」

おれが勝ったら、なんでも言うことを聞くんだな？」

「ズルいよ。大人が子供に勝つのは当たり前じゃない」

健治の言葉に、コータまで頷いている。

「子供でおまえよりも強い子がいたらどうする？」

「クラスではおれがいちばん強い。シンジが二番」

「クラスで男は何人いるんだ？」

「……五人」

声小さくなった。

「中学校に行ったら、おまえよりもでかいやつはたくさんいるはずだ。勝てるか？」

「うんと食べてでっかくなって、誰にも負けない。おれは、大人になったらプロレスラーになるんだ。そして、世界チャンピオンになる」

夢を持つことは良いことだ。

「世界チャンピオンになっても、ヒーローにはなれないな」

どらくろあ
ホームページ

バックナンバーも掲載しているので、ダウンロードしてお楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>



(なんで?)

健治の顔に書いてある。

「弱いやつをネチネチいたぶっているやつがヒーローになれるのか? カッコ悪いだろう?」

「だけど、強い方が……」

「コータはプロレスラーになりたいか?」

ブンブンと首を横に振った。

「シンジは?」

「大リーグのプロ野球選手」

ようやく子供らしい顔になった。

「プロレスラーになれそうな強いや

つに勝ったら自慢しろよ」

健治は不服そうだった。

「カッコ悪いやつは女にモテない。結婚できたとしても性格の悪いブスと一緒にいる。当然、子供も性格が悪い。そんな家庭でジジイになったら悲惨だぞ。友達もいないし、家族からも邪険にされて、誰にも面倒を見てもらえなくて、悲惨な最後を迎えることになる」

それは、健治の一つの未来である。

「世界チャンピオンだぞ。金持ちになつて、女にモテモテさ」

「ヒーローのカッコいいチャンピオンになれば、もっとモテるぞ」

たとえチャンピオンにはなれなくても、優しい女性と幸せな家庭を築けるかもしれない。それもまた、健治の一つの未来だ。

健治はしばらく考えていたが、立ち上がると自分のランドセルを肩に担いだ。そして、おれの顔をまじまじと眺めた。

「どっかで見ることがあるんだよな」
そう言い残して、石段を駆け下りた。慌ててシンジが後を追う。

「バナナ、ごちそうさまでした」
コータがペコンと頭を下げて、二人を追いかけた。背中中のランドセルが大きく揺れている。

(おれに似て、ひねくれてやがる)

苦笑を浮かべた男の身体がみるみる縮んで、健治ぐらいの年頃の少年になった。六地藏のお堂に近づくと、左から二番目のお地藏さんに歩み寄る。そのままスツと石仏の中に姿が溶け込んだ。

そのお地藏さんだけ、石の色が違っていている。まだ新しさが残っている。顔もツルンとした丸顔ではなく、どこか現代的な容貌だ。長らく破損していた一体の地藏尊を寄進した近在の篤徳の人がいる。石工の人に頼んで、交通事故死した自分の息子の面影を少しだけ地藏のお顔に写してもらったのだという噂がある。

六地藏とは、「地獄」「餓鬼」「畜生」「修羅」「人間」「天」の六道を行脚する地藏菩薩の姿をそれぞれ六体の尊像に現したものだ。六道の世界を輪廻転生しながら彷徨い続ける人すべてを救済して、極楽浄土に導いてくれると言われている。

山門の奥から、油蟬の鳴く声が聞こえてきた。蟬しぐれとはいかない。せいぜい三重唱ぐらいか。どこか音がずれている。無住寺になって久しいが、下手な読経の声のようにも聞こえるのだった。

まつの古本屋さん どら書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・ 無料本、百円本、50円本などのコーナー。無料の漫画ルームもあります。
 - ・ 地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
- ※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週月・火曜日（2月は店内整理で全休）
- 営業時間：9:30~19:00
- TEL：090(9913)3052

※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

< 広告料 1/4 ページ 1回 2,000円 半年間 9,000円 1年間 15,000円 >

今月の3冊

どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

「野垂れ死に」

藤沢秀行 著 新潮新書

天才&最強と呼ばれた囲碁棋士の破天荒な独白録。飲む、打つ、買うの放蕩三昧。毎晩泥酔して警察の厄介になったことも数知れず。競輪場に入り浸り、億単位の危ない借金を重ねる。愛人を作って子供を産ませる。そうした醜聞も負債も、盤上で取り返す。

囲碁界最大の賞金を誇る棋聖戦で六連覇、アルコール中毒で手が震えて碁石が持てないので壮絶な酒断ち。終わるとまた痛飲、泥酔する。三度のガンに侵されたが、当然の報いだと意に返さない。人一倍、囲碁に打ち込んできたという自負がある。羽目を外すのは、囲碁による精神の強張りをもみほぐすためだと胸を張る。「昭和の勝負師」伝。



「沈黙の川」

青木笙子 著 河出書房新社

「本田延三郎 点綴」のサブタイトル。戦前、戦中、戦後の演劇&映画界を生き抜き、数々の名作を残した演劇プロデューサー、本田延三郎の生涯。戦時中の本田は、左翼演劇の闘士であり、警察に検挙され築地警察署に留置される。その一週間後に作家の小林多喜二が築地署の特高刑事により惨殺、本田の自白が原因ではないかと噂される。



作者は数多くの文献から丹念に資料を積み重ねることで、実の父親である本田の「冤罪」を証明。戦前から現在に至る日本の演劇界の内幕も興味深い。脚本家としては挫折した本田だったが、演劇人であり続けた。そして、多くの演劇人を育てている。

「蟲師」

漆原友紀 著 講談社

最近、ネット無料配信のアニメを見て驚いた。原作の世界を忠実に再現している。背景の絵はまるで水墨画のように淡麗で味わい深い。音声も含めて、すべての完成度が高いのだ。日本が後世にまで誇りうるアニメ作品だと断言できる。

蟲の定義は難しいが「生と死の間、者と物の間にいるもの」、そして、普通の人には見えない生命体による怪異現象を解決するのが蟲師。主人公のギンコは、蟲をただ退治するのではなく、できるだけ共存の方策を選ぼうとする。とりわけ印象に残ったのは、文字に宿る蟲を描いた「筆の海」、アニメでは第20話、漫画本では第2巻に収録されている。



どら書房 << 貸本屋システム >>

- ・ 店内で販売した本は、どら紙幣（店内専用通貨）であれば半額、現金であれば3割で買い戻します。※破損や汚れがあれば値引
- ・ 書籍購入⇒読了⇒どら紙幣と交換⇒新たな書籍購入、貸本のような感覚でご利用ください。

どらくる俳壇&歌壇

一瞬といふ時間なり稲光

近藤 昌平

吟行のあの日の古墳草いきれ

冨久光

小鯛の刺身テンプラ生ビール

片岡 正人

過去の人忘れんとして髪洗ふ

隆愚

父の日や亡夫に供ふオールドパー

大槇 三代子

黒南風くろはえや首こうべを上げよ胸を張れ

赤川 冬人

立ち枯れの枝に朱しゆの花点々と

松岡 初枝

のうぜんかづらは死出けわいの化粧けわいか

投稿&寄稿

「デニムのシャツ」 赤川 仁洋

「つげ義春大全」(全22巻、講談社)の刊行が、今年の四月よりスタートしている。収録作品は一九五四年発表の幻のデビュー作から一九八七年の断筆までの作品、そして随筆家としても知られる著者の文章、イラスト

ト、写真なども収録しているようだ。日本漫画界の太陽が手塚治虫であるならば、月光のような妖しい輝きを放つのがつげ義春。陽と陰の大家である。講談社のサイトを訪問したら、税別で六万九千九百円。これで

※参加を歓迎します。

は手が出ない。古本として誰かが売りに来るのを待つしかないか。

同サイトに、つげ義春がフランスのアングレーム国際漫画祭2020で特別賞を受賞、トロフィーを授与される写真が掲載されている。サイトの解説では、「マンガ界におけるカンヌ」と呼ばれる由緒ある祭典らしい。

つげ作品の愛読者であるわたしは、あのつげさんがよく外国に行く気になったなど驚いたが、らしいと思っただのはつげさんの格好。不精髭にぼさぼさの白髪、着古したジャンパーを着こんでいる。生活のために漫画を描いていたつげさんにとって、授賞式の晴れ着なんか無駄使い……、そんな声が聞こえてくるような気がした。

わたしも、新しい服を買うことがめつきり少なくなった。慣れたものを着ていると安心する。今でも、三十年以上も前に買ったデニムのシャツを部屋着として使っている。全部で五着ある。安物なので、ジーンズの藍がすぐに退色、どうせなら白くしてしまえと漂白剤に漬けたら、これが大失敗で斑模様になってしまった。

それでも捨てられずに、作業着と

して使っていた。実家を古本屋にリフォームするときは大活躍、あちこちにペンキ汚れが残っている。部屋着として使うようになったのは、猫を飼いだしてから。野良猫だったので、爪切りの処理をすることができず、油断すると爪を立てられて衣服が破れてしまう。厚手のデニムの生地は丈夫で、今さら少々の傷が出来ても平気である。

洗濯してハンガーに干しているシャツを見て、「いい感じに古びてるよな」としみじみ眺めることがある。装飾が全部抜け落ちて、実用一点張り。こんな風に老いることができればとつくづく思う。虚飾がまだまだ多く、負けているのである。



短期連載寄稿 林原正好（鳥取県倉吉市）

「毛利家臣の赤川氏について」（その2）

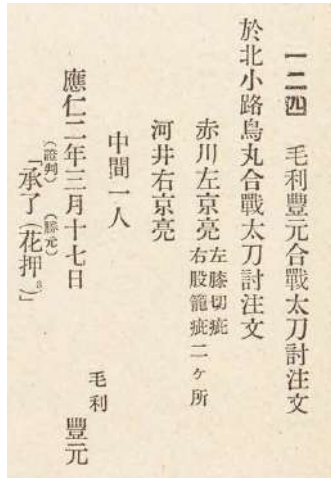
したがって、赤河右京亮房秀とはそういう重要文書を知り得る立場の人物であったと考えられ、毛利家の重臣（文書管理担当）ではないかと想像される。この日記は、毛利家重臣が重要文書を整理した旨を日記として残しておいたものではないかと思われる。

また、日付の享徳3（1454）年という時期は、毛利豊元が宝徳3（1451）年8月28日に父熙元から吉田庄等の所領を譲られ、享徳2（1453）年9月11日に室町幕府からこれを安堵されている。熙元から豊元への当主の交代時期といえるこの時期に、毛利家重臣の赤河右京亮が毛利家文書を整理して当主豊元に上げたという記録ではないかと想像される。

さらに、以上のことから付随してわかることは、赤川氏の一族であると思われる赤河右京亮房秀はこの享徳3年の時点ですでに毛利家臣となっていることである。『古城址は語

るー伝説と史ー』（以下、『古城址は語る』と記載）では、赤川氏は、応仁の乱の時に毛利氏と行動を共にし1470年頃から毛利氏と主従関係を結び臣下の礼を尽くすこととなったとしているが、この文書進上日記の日付からすると、その毛利従属の時期はもう少し早い時期であると考えることができるともかもしれない。

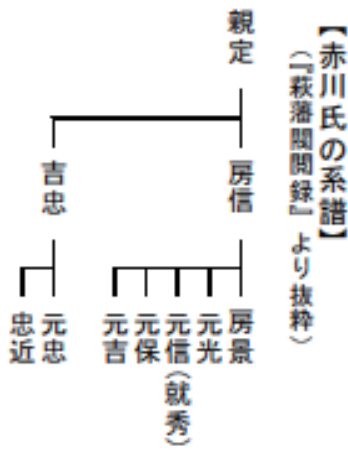
(2) 応仁2（1468）年の赤川氏のこと（記録されている文書）
『古城址は語る』の43頁に、赤川氏のこと（記録されている文書で2番目に古いものとして、次の毛利家文書一二四号が紹介されている。



『古城址は語る』によると、この文書は「毛利古文書の中で二番目に見当たる赤河（川）文献で、毛利豊元の手勢に加わり京都烏丸箒屋の攻防戦で、赤川房信の弟左京亮吉忠が奪

戦中に負傷した軍忠申請が出された記録である。」とあり、また、「寛正2（1461）年以来、管領細川勝元の命により毛利豊元は赤河房信等と共に山名是豊勢として畠山義就と戦っていた。初め紀伊、和泉と転戦し、河内に入り義就を追い討って京都に戦った。北小路烏丸の攻防戦や相国寺お花坊の合戦は激しく、後に山内氏へ宛てた持豊の褒賞状や、毛利氏へ宛てた勝元の軍忠状に記録を見ることができるとある。

また、この文書は、応仁の乱（1467年〜1477年）の初期における文書であるが、この軍忠状につ



いて東軍総大将の細川勝元が承諾をしていることから、毛利豊元や赤川左京亮は東軍側として戦っていることがわかる。

しかし、毛利家文書一四四号をみると、西軍に担がれていた足利義視（將軍足利義政の弟）の御内書が毛利豊元宛に出され「御方（みかた）に参り」とあることから、文明4（1472）年の時点では毛利氏は西軍側であり、東軍から西軍に寝返っていることがわかる。

このことについて、『古城址は語る』では、毛利氏や赤川氏は当初東軍として近畿に従軍していたが、その留守中に所領が押領されたため、戦地から引き上げ領地回復に奔走したが、領地を守るためには西軍山名宗全に与するより他に道はなく、西軍山名宗全側の大内政弘傘下に入った、とされている。

○毛利家文書一四四号
足利義視御内書
今度参御方、忠節之次第、被聞食候、尤神妙、弥相談大内左京大夫政弘代、可抽戦功候也
（文明四年）二月九日 花押（義視）
毛利治部少輔とのへ

どらくろ本 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

● 一 硬式テニス参加者募集 一
MTEC (Miyoshi Tennis Enjoy Club)
場所：三次運動公園の屋内&屋外コート
・火曜日(9:30～12:00)
・水曜日(9:30～12:00)
・土曜日(10:00～12:00)
連絡先：中川 (☎080-5610-2376)



庄原九日市特別企画 「貞弘さんの紙芝居」

無料です



日時：8月9日(日)

AM9:30と10:30 スタートの2回公演。

場所：まちなか広場入口のテント、雨天決行。

演目予定：「たからげた」「ろくろ首」

「永明寺のねこ」「円通寺の龍」他。



地元の民話もあります！

短い夏休みの思い出に！！

◇どら書房郷土資料本コーナー◇

郷土史関係の本や地元で出版された本、
地元の方の作品集(短歌俳句小説等)、地
元に関係する本を揃えています。非売品
で閲覧&貸出(無料)しています。寄贈も
歓迎します。

どら書房無人野菜販売コーナー

新鮮で安全な野菜を店頭で販売(値札のないものは百円均一)。
毎週水曜日の朝に入荷予定(元旦はお休み)。

●黒ニンニク好評販売中！●
(青森産ニンニクホワイト六片使用)

甘みと適度な酸味、ニンニク臭さはありません。
ポリフェノールを含み、抗酸化作用、滋養強壮などの
効果が期待できます。

(80g入り500円)

※売り切れのときはご容赦ください。

発行：どら書房
〒727-0012
庄原市中本町 2-1-10
☎090(9913)3052(赤川)
e-mail: touzin@sannet.ne.jp
年間購読料：2,000円(郵送料込)

誌面デザイン：ROUTE183
協賛：九日市愛好会

◇カープの梅雨明けを切望！
ありませんか。
でも、日本人の民意の高さを
世界に見せつけてやろうでは
ありませんか。
◇コロナ禍が再び拡大、自粛
疲れも理解できますが、何度
もほとんど自分で描かれてい
ます。
◇九日市の「貞弘さんの紙芝
居」、貞弘英雄さんは落語も
する方なので楽しみです。絵
もほとんど自分で描かれてい
ます。

編集後記

◇近藤昌平さんのこ
と、他にも紹介したい
作品やエピソードがた
くさんあるのですが、
紙面が足りませんでし
た。俳句ができること
ぐにメールをいただい
ていたのが僥はれま
す。今後もどらくろ俳壇では、
近藤さんの未発表作品を中心
に掲載させていただく予定で
す。

